

氏名：中村 絵里

氏名のローマ字表記：Eri Nakamura

所属：東京大学大学院 教育学研究科 博士課程

専門分野：教育開発、幼児教育、初等教育、養育者による学習支援

発表のタイトル：

ウランバートル市ゲル地区における小学生保護者のネットワークに関する考察

発表要旨（600字～800字程度）：

モンゴル国のウランバートル市は、急激な人口増加に陥っている。2015年には、ウランバートル市の人口は134万人を超え、インフラ整備の遅れと大気汚染が深刻化している。なかでも、住環境や社会サービス、そして教育の質の課題が山積しているのが、首都近郊のゲル地区と呼ばれる貧困層が多く居住する地区である。ゲル地区には、雪害等で家畜を失った元遊牧民の家族が新しい職を求めて地方から移住してきている。学校では、子どもの数が急増した結果、校舎や教室の数が不足し、政府から支給される教科書は児童・生徒全員に行き渡っていない。

このような課題に直面する小学校では、教員や学校側の努力だけでは、すべての子どもに十分な教育を保障するのは難しい。そこで、子どもの保護者や地域との連携が教育の質の改善に関わる重要な要素の一つとなっている。しかし、ゲル地区の小学校教員に行ったインタビュー調査から、新しい土地に移住してくる家族は、近隣住民との関係性が弱いことや、長期間にわたって仕事を得られず貧困に陥ったり、低賃金の長時間労働に従事しているため家にいる時間が短かったりと、様々な問題を抱えていることがわかった。

小学校では、保護者が通学路の立哨当番や学校の送迎を行ったりするなど、様々な取り組みが見られている。しかし、子どもの就学以前と比較して、保護者間および保護者と教員間の連携が深まっているのかどうかを明らかにした実証研究はない。そこで、本発表では、2016年9月と11月にゲル地区の小学校10校の保護者2,264人から得た質問紙調査の回答データを分析し、小学生の保護者ネットワークが、児童の就学前後では、どのように変化したのかについて考察を行う。また、ゲル地区の居住年数ごとに回答データを比較し、近年ゲル地区に転入してきた家族には、保護者のネットワークと学校との連携において、どのような特徴が見られるのかを明らかにする。